

第四回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第四回「文芸思潮」現代詩賞

第四回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで、今年は全国および海外から一千名を超える一〇七二名のご応募をいただき、いっそう充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、まず選考委員会予選担当による第一次予選、第二次予選の選考が行なわれました。それを通過した作品を対象に、五十嵐勉、池田康の各選考委員により、第三次選考、さらに最終選考が行なわれました（本年は河林満選考委員が急逝しましたが、欠員を補わずに二人の選考委員によって選考させていただきました）。厳正な審査の結果、残念ながら当選作は出ませんでした。以下の通り優秀作以下が決定しましたので、ここに発表させていただきます。

なお、今回も昨年以上に応募数が多かったことから、引き続き「佳作」を設け、すぐれた作品をより広く顕彰することにいたしました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」ウェブに掲載させていただきます。御期待ください。

現代詩賞の授賞式は、銀華文学賞、エッセイ賞と併せて、明年一月二十五日午後二時より三鷹産業プラザにて行なう予定です。受賞者以外の方も受け付けておりますので、お誘いの上ぜひ御参集ください。

第五回「文芸思潮」現代詩賞は、明年二〇〇九年も今年とほぼ同じ要領で募集を行います。締め切りは五月三十一日です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

当選

該当作なし

優秀賞

- 「ただうたうもののために」「夕暮れは……」
- 「透きとおる五月の愛」 佐山広平（愛知県春日井市）
- 「日向の歌」「凧」「カレイドスコープ」

長澤靖浩（大阪府寝屋川市）

「地球儀」「ねずみ」 二条千河（北海道札幌市）

「夕日ニ就テ」 佐藤閑月（福島県伊達郡）

「Lazy」「女子大量発生」

「浜辺の薔薇」「愉悦の氷塊」「最後のプレゼント」

「*you & me* in my heaven 7th o'clock loves he and his daughter」 木下 奏（神奈川県茅ヶ崎市）

憂愁 梟（大阪府大阪市）

「雪兄樹の無力」「花蝶ノ行軍」「美しさなき」

「やさしい世界」「オレンジ色」「足の裏」

「誰かの撮影」 斎庭京志（熊本県熊本市）

「あまやかな糸」「糸電話」 中原静香（東京都中野区）

「台所」 中島真悠子（千葉県鎌ヶ谷市）

「うそ」 滝沢英里（神奈川県横浜市）

「春陰」「就業」「だれでしたか」

「蟲の背に」「死亡時刻」「妄犬」 溝口愛子（長崎県大村市）

かせみなこ（神奈川県横浜市）

「六弁六譜」 船越篁入（静岡県浜松市）

「花の骨」「弔い人形」「凍える蝶」

桐ヶ谷忍（千葉県千葉市）

奨励賞

「淀川河川敷風景」「シリアス」「闇街ランプ」

「黒も白も黄もみんな」「November 1st」

エン（大阪府寝屋川市）

「黄色に染まる女たちよ」 Saori（東京都渋谷区）

「初鏡」「満月」「イン」

藤原ジュン（佐賀県佐賀市）

選評

矮小化と若い世代の台頭

五十嵐 勉

今年の「文芸思潮」現代詩賞は千人を超す応募者があった。昨年は六三人だったので、倍に近い増加である。日本および海外に日本語で詩を作るうとするたくさんの人の意思が見られることは、大きな喜びだった。しかし一方で、当選作が出なかったことはきわめて残念だった。数が増えれば質も上がるとは言えないことを実証する結果になってしまった。スケールの大きな詩、深い底をたたえている詩にはお目にかかれなかった。河林満選考委員の急逝によって、選考の穴が出ないよう、彼の分もがんばって審査したつもりだが、「文芸思潮」として世に推せるだけの作品に届かなかったのは、大いに遺憾である。これは詩に何を託すかという詩想の矮小化にもよるのではないか、ならばどういう方向を示すべきか、具体的な提示や実際の修練の提供も必要なのではないか、と考えさせられた。そんな中で希望が膨らんだのは、今回の応募者には十代、二十代の人たちが増え、またそれなりに優秀な作品を寄せてきたことである。

優秀賞七名のうちの女性五名は二十代と十代で、うち一人は高校生という、みずみずしさや、初々しい感性には富んでいた。未熟さや線の細さも目立つが、何よりも詩によって自分と世界との接点を得ようとする希求は、それなりの根を有していることに、安心を覚えた。この根はやがて大きな花を咲かせ、果実を得るだろう。奨励賞や佳作にも、また予選の作品にも、十代、二十代の作品にいい感性が目についたことは、今回のコンテストの一つの特徴だった。

また小学生で一つの学習塾でまとめて応募してきたり、高校の一つの文芸部でいっしょに応募してきたり、団体としての活発な詩作も期待を持たせてくれた。これらの指導者には拍手を送りたい。

佐山広平氏は第一回の優秀賞、第二回の当選、第三回の奨励賞、今回の優秀賞と連続しての入賞で、これは賞賛に値する。三篇の中でも特に「ただうたうもののために」は、澁刺とした感覚がほとばしっていた。残念なことには他の作品に、昨年指摘された繰り返しが多さやパターン化された弱さが目立った。二回の当選を果たした応募者はこれまでにない。重ねての当選は前作以上の質が要求される。果敢に挑戦していただきたい。

斎庭京彦氏は「雪兄樹の無力」に見られるように、作品世界が深化している。重みと陰影が増した。二十歳前後でのこの変化は、成長を確認するものとして注目した。

木下奏氏の作品は視覚も詩の要素に取り込んでいる現代風のもので、「Lazy」はさらに二重カッコによって内部との対話の形で行を進めているが、それが一つの言語空間から現代の都市風景を切り取っているところに、造形を感じた。これらの形そのものは、珍しいようで、そう珍しくはない。視覚としての詩は、一見奇抜で人目を引くが、それが奇として終わるのではなく、詩想をいかに深く刻み付けるかが重要になってくる。外形を支える感情世界の深さを今後いかに掘削していくかが課題になるだろう。詩の造形は小手先ではできない。肉と血と神経の生身で作るしかない。形に寄りかかったとたんに、血潮の力は失われるはずである。

中島真悠子氏の長い詩「台所」は、台所という日常の場所に野菜をとおして家族の肉体のつながりや歴史を引き出してくる独特の感性がある。台所での存在論を展開しながらここに潜む不安は、詩の形に留まることなく、小説などにも波及していきける、ある脈を感じさせる。ここに書かれたものは、片鱗として見るべきかもしれない。

これまでの優秀賞の最年少である、かせみなこ氏は十七歳の高校生だが、その切れのある言葉は、言語造形の豊かな資質を見せている。「春陰」は愛情と殺意の交錯を縦糸横糸に配しての春の心模様を一つの表現に込め切った快速球の印象がある。作者の自覚以上の素質を感じるが、その素質を扱いあぐねている困惑も感じられる。ない詩才を追って棒に振る人生もあれば、溢れる詩才によってつぶされる人生もある。賭博者の運命を引き受

佳作

- 君たちだって／それは／相対性理論
 掌握の砂／円球／Cube／蜉蝣
 シオン
 平行螺旋／眠る遺跡／果肉の沈黙
 断罪の雪／月のロンド／袖口の宇宙
 薔薇／おんなの海／秋
 海とABC／暁のパジエロ／くらい街
 ほんとうの鉛／空のゆくえ／女たちの渡し
 甘い香り／ロンド／映写機
 認知症の砦
 エデン／林檎
 あたしとママ／芽吹き春／行方不明のあの子
 雷鳴が僕を呼べば／7月6日／一方的な、愛ですが、
 くだいて／内部を見なさい／生きる意味
 opulenti／吟遊詩人／自然のように
 生命賛歌
 水のほん／都会ソナタ／手のひら
 養鶏場／猫背と目／だからいきる
 音／モノリザの手／おはようございます、あなた
 ツオウクオウトオワ／My Sunday／普遍の入浴
 おじさん／ねえさん／はは
 黒の都／ラビ死骸／紙町紀行
- 小針 昂
 水城古都
 泉 志
 灰根子
 葉山みとと
 佐々幸子
 アカシアミモザ
 後藤 順
 有沢志摩
 土井 彰
 彩森さず
 鈴木ちさと
 田那部こころ
 ガーベラ
 阿部真里子
 史 あやこ
 福田ゆかり
 原中亜由美
 熊沢さとみ
 細川 恵
 永井 一
 今唯ケンタロウ

けるか否かだが、意外に偶然がひよいと背中を押してくれるかもしれない。人間が選ぶ程度の運命では、真の詩人は育たないかもしれない。

奨励賞のなかにも「死亡時刻」(溝口愛子)や「凍える蝶」(桐ヶ谷忍)など見るべき作品が少なくなかった。

しかし全体的に、詩でなければできない発想の飛躍や鮮烈なイメージには乏しかった。「天を貫く言葉」「燦然ときらめきを放つような結晶感のある言葉」には、ついに出会わなかった気がする。

現実の世界から顔を背け、ハスに構える逃げのポーズそのものが詩だと錯覚しているような作品が多い。便利さや快適さに覆われてしまつて、世界と向き合う裸の言葉はなかなか持ちにくい現代ではあるが、その奥に潜む真の輝きを取り出してぜひ提示してほしい。詩人はもつと豊かで、もつと悲惨で、もつと激しく叫び、苦悩や絶望からもつとまぶしく輝くはずである。孤独の修羅をとおして到達する灼熱の世界を見せてほしい。

もう一つついでに苦言を加えると、ペンネームがあまりに陳腐で、詩の言語と相反するものが多い。「つきよのはるたまご」「憂愁かも」「エン」「アカシアミモザ」「ガーベラ」「斎庭京彦」「彩森さず」など、芸のないペンネームにはうんざりする。ペンネームに必然性を感じられない。いくら詩がよくても、これらのペンネームで詩を作っていくとなると、言葉に対する姿勢が土台から疑われるだろう。詩人にとつてはペンネームも詩の一部だと考えると、この筆名が逆に詩の世界を制約する場合もあり得る。損をする場合も少なくないだろう。今回はペンネームも審査基準に加え、あまりにひどいペンネームは大きく減点としたい。

便利さや視覚的な美しさは満ち溢れている。またどこもかしこも規制に縛られていて、管理の網はより広くはりめぐらされつつある。どこかおかしさと漠然と感じながら、根源的な自由はより狭められている。危機意識を持っていてさえ、侵蝕され、壊されていくばかりのように映る。反抗も抵抗も無駄に見える。しかし世界や社会の虚偽に、この歯止めのかからないかさまに、詩人が叫ばずしてだれが叫ぶのか。自然の本源を貫いてなおかつ宇宙の暗黒のなかへ光芒を放つ言葉は、精神の中核に成り得る。自分という肉体の形を超える何かがそこに生まれることを信じてほしい。

詩心を職人に仕立てて

池田 康

今回は当選作が出なかった。残念だが、これぞというものがなければ見送りも仕方ないという強い方針が五十嵐編集長から出ていたので、なるべくしてこうなったのだろう。千を超える応募があったが、数が多ければいいものが出るとはかぎらないということのようだ。

そのかわり、優秀作が七つ並んだ。
二条千河さんは今回は叙事詩的構成法をとらずに、抒情詩の枠で挑戦している。「地球儀」では地球儀という特異なオブジェ・イメージを利用して、世界と自己との関係、自己が世界に巻き込まれるか、逆に世界を動かすかという、生きる上での姿勢の選びの大問題を洗練された詩行のなかにたくみにクロウズアップしている。「ねずみ」では業というもののやるせなさをネズミの歯に仮託して、これも余計な文飾なく鮮やかな形に仕上げた。徹底してごまかしを排する作法の美学に共感する。

長澤靖浩さんも前回(ペンネームで)奨励賞だったが今回評価をあげた。「日向の歌」の、無垢にまで研ぎ澄まされた愛情の無邪気さが恐ろしい。「きみが/最後のプラグを抜いたとたん/宇宙のくしゃみが/僕の頭を吹き飛ばす! / あつ/ という間に/ 肩から下だけになったのは/ あつ/ という間に/ 肩から下だけになっちゃったきみの/ かわいい桜色の乳首をつまんでいる」微笑ましくしかも狂暴であるという、稀な取り合わせ。そして「凧」も「カレイドスコープ」もそうだが、どこかに世界の中心を得てそこから自らの視線によって世界全体を透明静寂にしてしまう千里眼的至福感があり、こういう印象を生む詩はなかなかない。

過去に当選にもなったことがある佐山広平さんは「ただうたうものために」で回顧の視線の抽象性というこれまでの作品を特色付けていた枠を破り、「今」にかかわる行為の生々しさを獲得しているように思われる。繰り返される「川におりた」というフレーズの含む意は、その前に「探す

象的だった。

藤原ジュンさんの「満月」は経験の重さ、感情のかけがえのなさが堂々と湛えられていて、読み過ぎすことの出来ないなにかがある。家族という現実と土地という現実とが交わるところに現れる真実と向き合おうとしている姿勢の貴重さを大事にしたい。

溝口愛子さんは去年に引き続き今回も人間の生活のネガの領域を詩で探っている。「蟲の背に」の冒頭、「皮膚を啄ばむ群青の破片/夜の斜め後ろから差し込まれてくる叫びに/つと見上げる斜め後ろの荒野」というつらなりはすばらしいが、後の展開がこれを受けきっていない感がある。歌い流すばかりでなく作品の全体ということを意識して構築することも必要だ。

Saoriさんの作品は独自のリズムがいきづいていて、情熱と活気が伝わってくる方がいい。詩行に力があり、輝きがある。思わせぶりの詩は世に多いが、リズムと力をそなえ、それを十全に駆動させる詩にはなかなか

ために、「もとめるために」というくだりがあることから、ある重要な決意にかかわるものだと読める。「透けた遠い空の/空気が凍てつき結晶しているところに/とじこめてあったエメラルド色のガラス細工/そして鋭い切っ先にほくの指が傷ついたとき/川底をさぐる日常の重さの/ほくは知のかたちになれる」この傷の痛さが伝わってくるところにこの作品の観念を破るきつさの實在を感じる。

齋庭京彦さんは今回も強烈な独自色の作品を提出した。なかでも「花蝶ノ行軍」は、そのいうところの「本物の遊び女」の野遊びの、世界全体を遊び道具にしてしまうかのような豪華な幻覚が乱れに乱れた文脈のなかに感じられ、凄みがある。でたらめな戯れのように見える姿の中に心意の強さがおとついでいて、危ういダイナミズムが顕現した。
中島真悠子さんの「台所」はジャガイモの芽の毒を自分の内側の病んだ部分にひきつけて、姉や母といった家族の心理劇をも巻き込んで含蓄のある詩をつくった。シーンの変化が非常に繊細で興味深い。一行目に出てくる「包丁」と、最後の行「静かにぬくい朝の明るい台所」とがどのようにつながっているのか、読み解きたい気持ちにさせられる。

木下奏さんの作品は独特の活気にみちている。一見無軌道な乱れ方のように見えるが、なにやらリズムが感じられ、それが一篇一篇を作品たらしめている。「女子大量発生」がもつとも好感をもつて受け止めることが出来た。とても奇妙で、とても可笑しく、しかも鋭く迫ってくるものがある。萩原恭次郎の詩を思わせるような創造的破壊衝動がうごめく詩。

かせみなこさんの「春陰」は、若い女性の、自分自身をつかみきれない苛立ちがはげしい動きとなって言葉を散乱させている。「とうきょうとつ、きよ、きよ、きよ、かきよく/ねえきみを殺せるよ、台所のね、流しの下にね、包丁があつてね、/ねえだからわたしも殺せるんだよ知ってる? / 東京特許許可局局長急遽特許許可却下」とも魅力的で面白い行々。

奨励賞では、まず佐藤閑月さんのきわめて異色の作「夕日ニ就テ」に度肝を抜かれた。漢文読み下し文のスタイルをかるがる縦横にもちいて、夕日をめぐっての世界史的体験をイメージからイメージへ飛ぶように織りつづり人類の斜陽の大光景を想い「夜ノ眠リハ無防備ナラム明日復夕日ハ昇ルヤ私ノ上ニ日ハ昇ルヤ」と書き記す。雄渾さと眼の利き具合が実に印象

か出会えないものだ。そこら辺にこの人の書くものの価値があるのではなか。か。

佐藤宏次さんの「足の裏」は、しっかりとこの地面に立とう、ということとを言っている詩で、語り口も非常に素直。そう片付けてしまうと、なんだそれだけか、と訝しく思われるかもしれないが、よく書けていて、充実しているのである。単純なテーマで、素朴な書きぶり、これだけよくまとまっていると、かえって不思議の感に打たれる。ある意味、詩の原点を示されたような気がした。

エンさんの「淀川河川敷風景」は、イメージ構成の絵であり、非常に洗練されている。洗練の高さゆえに、静かに結晶してしまい、底から湧き上がるような力動感が生まれてこず、文学賞の競い合いではやや損をする部分もあるかもしれない。しかし静寂を造形しようという意志は確実に作品の中に刻み込まれている。

若い人が詩を書くとうると、手探りで言葉を探り、つなげていくしかなく、苦心惨憺やっているとあやしげな雰囲気生まれてきて、書き手を酔わせる。しかしそれが詩と安易に思い込まないことだ。むしろ雰囲気のものもやはいっそ捨ててもいいものはずだ。それを超えたところに自分自身の言葉が明瞭な光を発する段階はかならずあるのだから、心を鬼にして、あるいは詩心を職人にしたてて、どうにかそこに至ってほしいと願っている。

選考委員紹介

池田 康

いけだやすし
1964年愛知県生れ
名古屋大学大学院文学研究科修了
詩集「ロマンツェ」1994 詩集「星を狩る夜の道」2005
詩集「星を狩る夜の道」で文芸思潮詩人賞受賞
詩と音楽のための「洪水」(洪水企画)を編集発行
http://www.kozui.net/

五十嵐 勉

いがらし つとむ
1949年山梨県生れ
早稲田大学文学部文芸科卒業
「流瀆の島」で第2回群像新人長編小説賞受賞
「東南アジア通信」「アジアウェブ」編集長
「緑の手紙」でインターネット文芸新人賞最優秀賞
「鉄の光」で健友館文学賞受賞
現在「文芸思潮」編集長
「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」を連載中



選考会風景

ただうたうもののために

ぼくはあの遙かな雲のかなたからやってきたもののみなもとを探すために川におりた
 そこで遠くにある囁きを聞く
 やさしい眩きを聞く
 青春の観念の軌跡が風景の奥に消える
 不安の時間
 ぼくはあたたかい匂いにふれる

ぼくはいまわしい追憶をのがれるために
 ひふが梢のイメージに触れる
 日々が日常と和解する森を歩く
 目のない魚が流すあおいろの血
 都市の舗道の足跡の痛み
 硝子の堅い断ちあとが放つ鋭い白い光
 ぼくは生きるかたちにふれる

ぼくは深緑のはげしい匂いをのがれるために
 赤い結晶の砂粒のなか
 砕かれた記憶の破片を拾う
 てのひらが水の意志にあたる
 かたい感覚は都市のイメージを溢れだす
 そして日差しにつらぬかれ愛を呼びもどす
 ぼくは世界のかたちにふれる

ぼくはさわやかな記憶を想起するために川におりた
 透けた遠い空の
 空気が凍てつき結晶しているところに
 とじこめてあったエメラルド色のガラス細工
 そして鋭い切っ先にぼくの指が傷ついたとき
 川底をさぐる日常の重さの
 ぼくは知のかたちにふれる

ぼくは世界の中核にあるものをもとめるために川におりた
 記憶のまへに佇み遙かな声を聞く
 やわらかい松葉の針
 瞳孔に突き刺さる意志
 あこやがいが真珠をいだくときに流す色
 若い雄鹿の知の澄んだ眼の光
 そして陽がほほ笑み流す風景は

〈川底でひろった赤い結晶の奥で
 やさしい幽かな響きが揺れ
 かって愛したイメージが鮮やかに濡れる〉

そして夕暮れがひろげる
 風景を愛する
 色彩を愛する
 稜線を愛する
 人々の歩くビルディングを 街角を 舗道を 愛する
 そのとき
 ぼくは風にはこばれてくる花粉に噓せた
 ぼくは蝶のおとした鱗粉に咽せた
 そして
 あの遙かな雲のかなたからやってきたものを探すために川におりた



佐山広平

さやま こうへい
 昭和二十四年に新制中学校を卒業した後、菓子問屋の小僧、手作り飴の職人見習い、印刷工の職を転々とする。その間に愛知県立瑞陵高等学校定時制に入学し、卒業する。後国立愛知学芸大学に入学し、卒業。受賞歴「文芸思潮」現代詩部門。優秀賞・現代詩賞・奨励賞。羽生市主催「ふるさとの詩」佳作入賞。白山市主催 千代女全国俳句大会「つるべ賞」受賞。○「名古屋文学」同人。「宇宙詩人」同人。○ 詩集「散乱する実在に」・小説「華やいだ虚無を求めて」(自費出版)



受賞の言葉 佐山広平

九月十六日(火曜日)の夜、「文芸思潮」の五十嵐勉さんから優秀賞受賞のお電話をいただき、喜びはありながら僕はある気恥ずかしさに襲われつつあった。それは僕自身、己れを社会の事象や時代の事象に、また生の事象に投与する僕自身の軌跡を言語化せねばならないと思っているのにもかかわらず、そして今僕の書く「詩」が最近また古くさいリフレインに寄りかかった抒情的な作品になつて、僕の指向する詩、思想的に、また知と感性を深めた詩作品として書いていることへの恥ずかしさであった。受賞の喜びを嘯みしめながら、今はただ指向する詩への言語に依る構築に賭けねばならないと思いつづけている。

ただうたうもののために

ぼくはあの遙かな雲のかなたからやってきたもの
みなもとを探すために川におりた
そこで遠くにある囁きを聞く
やさしい眩きを聞く
青春の観念の軌跡が風景の奥に消える
不安の時間
ぼくはあたたかい匂いにふれる

ぼくはいまわしい追憶をのがれるために
ひふが梢のイメージに触れる
日々が日常と和解する森を歩く
日のない魚が流すあおいろの血
都市の舗道の足跡の痛み
硝子の堅い断ちあとが放つ鋭い白い光
ぼくは生きるかたちにふれる

ぼくは深緑のはげしい匂いをのがれるために
赤い結晶の砂粒のなか
砕かれた記憶の破片を拾う
てのひらが水の意志にあたる
かたい感覚は都市のイメージを溢れだす
そして日差しにつらぬかれ愛を呼びもどす
ぼくは世界のかたちにふれる

ぼくはさわやかな記憶を想起するために川におりた

透けた遠い空の
空気が凍てつき結晶しているところに
とじこめてあったエメラルド色のガラス細工
そして鋭い切っ先にぼくの指が傷ついたとき
川底をさぐる日常の重さの
ぼくは知のかたちにふれる

ぼくは世界の中核にあるものをもとめるために川におりた
記憶のまへに佇み遙かな声を聞く
やわらかい松葉の針
瞳孔に突き刺さる意志
あこやがいが真珠をいだくときに流す色
若い雄鹿の知の澄んだ眼の光
そして陽がほほ笑み流す風景は

〈川底でひろった赤い結晶の奥で
やさしい幽かな響きが揺れ
かって愛したイメージが鮮やかに濡れる〉

そして夕暮れがひろげる
風景を愛する
色彩を愛する
稜線を愛する
人々の歩くビルディングを 街角を 舗道を 愛する
そのとき
ぼくは風にはこぼれてくる花粉に噎せた
ぼくは蝶のおとした鱗粉に咽せた
そして
あの遙かな雲のかなたからやってきたものを探すために川におりた

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

佐山広平

さやま こうへい

昭和二十四年に新制中学校を卒業した後、菓子問屋の
小僧、手作り船の職人見習い、印刷工の職を転々とする。
その間に愛知県立瑞陵高等学校定時制に入学し、卒業す
る。後国立愛知学芸大学に入学し、卒業。
受賞歴 「文芸思潮」現代詩部門。優秀賞・現代詩賞・
奨励賞。
羽生市主催「ふるさとの詩」佳作入賞。
白山市主催 千代女全国俳句大会「つるべ賞」受賞。
○「名古屋文学」同人。「宇宙詩人」同人。
○ 詩集「散乱する実在に」・小説「華やいだ虚無を求
めて」(自費出版)



受賞の言葉

佐山広平

九月十六日(火曜日)の夜、「文芸思潮」
の五十風勉さんから優秀賞受賞のお電話
をいただき、喜びはありながら僕はある
気恥ずかしさに襲われつづけた。

それは僕自身、己れを社会の事象や時
代の事象に、また生の事象に投与する僕
自身の軌跡を言語化せねばならないと思
っているのにもかかわらず、そして今僕
の書く「詩」が最近また古くさいリフ
レーンに寄りかかった抒情的な作品にな
っていること弱さそのものを知らなが
ら、僕の指向する詩、思想的に、また知
と感性を深めた詩作品として書いていな
いことの恥ずかしさであった。

受賞の喜びを噛みしめながら、今はた
だ指向する詩への言語に依る構築に賭け
ねばならないと思いつづけている。

世界からきえたい消えたい、と
曇り空から
涙になってゆくおまえたちを
たべる

とても不味い悲しみには
どうしても慰めの砂糖が要った冬の日
妖精がみな灰になったのは
誰のせいだか
判る子はいるか？

絶望の夜をつくるのは太陽かこの星か
手のとどかないものを睨めども
憎めども
敵に生かされることにかわりはなく
おまえたちは玩弄され
抜け出せもせずに消滅を願う
苦しむ魂は彷徨うように
生きながら
巡る

のどは始終激しい懺悔に灼かれ
歌わせても貰えぬ
いくら脚をさまよわせても
一向に花の種には至れず
もぐらの鼻先すら見えず

苦しい醜い俺の首を
折らず潤すのはおまえたち

たすけて
と
叫べなくなった
聖者
死なせて
と
叫ばずして生きてゆけない
美しい者たち

俺ののどを通り
暗い土にねむるならまだしも
再た化けて
ひかりに召される
浄き采女は枕も持たず
枯れたい涸れたいのだ、と
永劫しとどに滅果実らし
五臓厚みゆく
樵待ち万年

おれは
木屑か

屑だ

雪兄樹の無力

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

斎庭京壺



ゆにわ きょういち

1987年6月生まれ。
尊敬している詩人は宝野ア
リカ・佳宵布由。

受賞の言葉 斎庭京壺

前回に続きまして榮譽ある賞を頂き、大変光栄です。

「雪兄樹の無力」は、前回頂いたアドバイスを元に、自分の体験を軸にして書いた作品です。率直に書いてしまつたと、込めたいものが生々しさに負けてしまうため、架空の樹に

後悔を託してみました。彼、はその意味で愛おしい存在になりましたし、読み手のかたの心次第で色々な感情を背負えるものであつてくれると良いと思います。

対して「花蝶ノ行軍」には、特にコンセプト・主張はありません。あえて全体に意味を通さず、筋を抜き、言葉の連なりで絵を描くことを目標にしてみました。

「美しさなき誰かの撮影」は、雑談の中で弟が「俺だつて見えない所で苦労してるんだよ」とはやいたのを受けて、私の周りの人達はどうやってそれでも立っていられるんだろ、という疑問が頭に浮かんだことと、昼夜太陽にさらされている地球はまるでフラッシュをたかれている被写体のようだと思つたのを種としています。例えどんな過酷な環境におかれたとしても、人がさいごに求めるのは結局人で、その姿は美しさを掴もうとするカメラマンに似ていて、また星の外側からもう一人それを撮影している巨大なカメラマンがいる……という、自分でも少し混乱するようなイメージを込めました。

当たり前といえば当たり前ですが、この世界ではものが動くときには必ず力学的エネルギーが作用しています。では人の心が動くときはどうかといえば、きれいな日の出のような自然現象のこともあれば、たった一言の挨拶であることもあります。

唯一、すべての物事から自身を脈打たせられる可能性を持った、心というものにアプローチする手段としての詩に、関して学びたいことがまだまだ沢山あります。技術的にも精神的にもまだまだ未熟ではありますが、このたび頂いた優秀賞を励みに、これからもまい進していきます。

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

中島真悠子



なかしま まゆこ

1987年6月6日生まれ。
千葉県出身。
現在、早稲田大学に在学中。
所属同人誌等なし。

受賞の言葉

中島真悠子

小さいときから本を読まず、中学高校時代には図書館好きの、しかし本を読まないおかしな少女になっていました。というのも、本の装丁を眺めるのは好きなのに、いざ読もうと手を触れるとたちまち動悸がしてしまうからです。そんななかで読むことができたのは主に詩や短歌といったものですが、おそらくそれは読むのに小説ほど長い時間がかからないこと、あるいは当時の私の頭では読んでもよく意味がわからないことが幸いしたのでしょう。今となっては自分でも不思議に思いますが、その頃が一番言葉というものを純粹

台所

包丁の角をつきたてて
ぐるりとねじこみ えぐる
台所の隅に置かれてあったじゃがいもは
いつのまにか芽を伸ばしていた
毒を含むそこ
新しい生 は
朝の台所で
儀式のように
正しく切り取られていく
ざらつく表皮
歪みくぼんだ塊
内からあふれた芽
そのように
姉の腕が
母の舌が
出てくる出てくる
目が髪が歯が
背から肩から頭から
歳月をかけて
かすかに毒を含んで
いつだったか
伸びすぎた芽をあきらめて
そこからもう一度育てようと

庭に埋めたじゃがいもに思いを馳せる
と
とたんに湿った暗闇の中
丸くうずくまって眠る私
髪は伸びていく根となっていく そして
この家を支える
家からはいつもかすかに人の声がするから
聞きながら不思議な夢を見ている

…… 水、の音……

誰かが霜をふみしだしている

(消えた星々が渦をつくる)

目覚めはじめた朝のあいさつ

(私は澄んだ卵を抱いて)
いつも迷っていた

(たくさんの粒が)
起きるのか 起きないのか

(爆ぜては消え……)

遠く鳴り響いている目覚まし時計

……

(……)

やがて

姉のめが土中から這いだし空を見据える

母のはが風に揺れる

私は私に似た誰か

わたしになつてゆく

私は待っている

掘り起こしてくれるやさしい手

に楽しんでいたような気がします。

そうしていつのまにか自分でも詩を書くようになった、ある時は言葉から見捨てられてしまったような絶望感を、ある時は言葉と懐かしい友人と旅に出るのに似た穏やかな高揚を覚えたりしながら、細々と書き続けてきました。詩を書く上で、私は時に設定にフィクションを用いますが、詩に込める想いまでも作ることはしてはいけなないと戒めております。

私は四人姉妹の末っ子として生まれ、今日までほとんど「女たちの家」と言っている環境で生きてきました。関係はいたって良好ですが、母娘・姉妹というのは根強い不可思議な愛憎でつながっているようにも思え、また説明しがたい深い縁を感じます。

今回の詩も、稚拙ながらそのような実感を込めたつもりでしたので、選んでいただけに何やら救われたような思いです。本当にありがとうございます。

するすると皮を剥けばこんなにも

おいしく肥えた内実だと

子宮のようにたつぷりと水を張ったボールに

ごろりと沈めれば

静かにぬくい朝の明るい台所



きのした かなで

1983年生
オフィシャルサイト
<http://knst.xxxxxxxx.jp/>

2007年6月頃から詩作を開始。
2008年1月に新宿眼科画廊にて詩と
写真のコラボイベントを開催。

第一詩集

「Unhappy Kingdom」(私家版)

第二詩集

「overturn boat whirl pool」(太陽書房)

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

木下 奏

受賞の言葉

木下 奏

この度は、すてきな賞をいただきありがとうございます。
ございます。

詩というものを書き始めてから、まだ一年程しか経っていないので、正直驚きを隠せませんが、身に余る光栄として嬉しい気持ちで一杯です。

私にとって詩とは無限大に遊ぶことが出来る表現方法の一つだと感じています。

さらにテーマとして音を感じる詩を書いていくのなら、と常々思っています。

そして詩というものの持つリズムや、自由な形式での言葉遊びを、今後も自分なりに楽しんで追求していけたらと思っています。

改めまして、今回このような賞をいただけたことに感謝致します。

本当にありがとうございました。

Lazy

発光するペット、((五万回かき鳴らした日常の最中))
沸騰するカップラーメン、((誕生日祝いを百回繰り返すような脳味噌))
間に何もなければ、((快樂のともだちを今から呼んでくる仕草))
ただ私の毎日は容易い、((赤ん坊の如く嘆けば良いのだから))
いつだったか渋谷のレコードショップで、((アナタはシーフードアレルギーだ))
トマトスパゲッティを頬張ることを、((受信していたのは悪夢で))
ただひたすらに望んでいたことは、((おめでとう、あなたのかのじょ))
都会の真ん中で、((おめでとう、あなたのかのじょになれなかったわたし))
ぬくもりを欲することと、((おめでとう、わたしのかれしになれなかったあなた))
似通った意味を持つ、((発信していたのは希望とそれから))
ああああああああああ、((こうしてたまに発狂するのだから正常だ))
いいいいいいいいいい、((インドのカレーが辛いぐらい当たり前だ))
あいしていいいいいます、((冷蔵庫にまだカステラは入っていたかしら))
mmmmmmmmmm、((ペンとノートを持って旅に出よう))
薄くなぞった紙の裏側に答えよ、((缶詰にはみかんジュースを))
おまえが本当に愛するものは誰か、((着色料は使わないでダーリン))
おまえが本当に愛するものは、((きらめく星空のファンタジー))
ソマリアを飼っているのは知っている、((リアルに好きと言えたら))
おまえの最愛の猫は、((醤油にバターは意外に良い組み合わせだな))
おまえが愛する猫は、((みりんにしょうがはいたってふつうである))
おまえの中の猫は、((生クリームに黒糖は信じられない))
おまえが好きで、((コンデンスミルクに豆乳なんてバカかと))
おまえが好きで、((でもキミが旨いというなら旨いのだろう))
おまえが好きで、((空白を埋めるように甘いものを欲して))
たまらなく、((緊張のあとに訪れる快樂を欲して))
すきで、((まともに暮らすには到底及ばない速度で))
すき、((朝十一時現在世の中に適応できていなくて))
か((カステラのひとつが己の分身になってくれていたと知る))

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

春陰

千円札についた染み
数えられるだけのしあわせだけ
思い返している

しますか
きみを殺せたと思う

しますか

思うさまきみを

せますか

殺せたと

すますか

殺せたのに

すました

信じています

ころのそこから

信じていました

います

あなたが

わたしを

信じて

いないのに

祖母の形見の化粧棚の三番目の引き出しの
ちりめんの小物入れの中のおしろい花の
種の植えた先のプランターの出ない芽の
落胆の捨てるべき先の化粧棚の4番目

きみがくれないポーチの中にマニキュア

飲み乾す

オーロラに輝くことばが喉に絡み付いて

何一つ言えないです

とうきょうとつ、きよ、きよ、きよ、かきよく

ねえきみを殺せるよ、台所のね、流しの下にね、包丁があつてね、

ねえだからわたしも殺せるんだよ知ってる？

東京特許許可局局長急遽特許許可却下

飲み下す！

どこかの哀れな少女の口から溢れ出る宝石の
輝きのしあわせの微塵も欲しくないのあなたの
手のひらのしわとしわを合わせてしわあせ、

どこかの哀れな少女の哀れな姉の口から溢れ出るかえるの
悪寒のふしあわせの微塵にいたるまで必要なわたしの
ことばの

残像

マニキュア

におう

ねえ、

殺せる

のに

な

かまつて。

かせ みなこ

1990年生まれ
高校三年生

かせみなこ

地球儀

机の上に 古びた地球儀がひとつ
少年は頬杖を突いて
地軸と同じ角度に首を傾げた

やたら勢いよく回転しているのは
誰の悪戯か

大陸はめまぐるしく昼夜を巡り
波立つ七〇パーセントの海に
島々は沈んでしまう

それならこの部屋も 机も何もかも
高速の遠心力に引っ張られて

今しも振り落とされそうになっているのは
間違いないのだ たぶん

生まれてこのかた ずっと

誰かの手が両足首を押さえてくれていて
宇宙空間へ放り出されることもなく
どうにかみんなと一緒に回ってきた

上へ下へと引っ張られ
人並みに身長も伸びてきた
けれど

自分ではない誰かを中心に回る世界は
向きも速さも減茶苦茶で

いいかげん 平衡を失い始めているのも

事実なのだ たぶん

少年は震える人差し指を
地球儀に近づけていった

最初に触れたのが
ヒマラヤ山脈だったか
サハラ砂漠だったか定かではない

滑らかな地表は
指紋の溝との間にわずかな摩擦熱を発生し
やがて回転をやめた

ふと気づけば

足を大地に繋いでいた手は
いつしか消えうせて跡形もない
人差し指は太平洋の片隅を
さし示したままだ

どうする

その指でついに
君が地球を回してみるか
それとも 解き放たれたその足で

床を蹴って
自ら回ってやるか

どちらでもいい

選んだ瞬間から
世界は君のために回り始める

第4回「文芸思潮」 現代詩賞 優秀賞

二条千河



にじょう せんか

北海道札幌市出身。
2005年に詩集『赤壁が燃える日—現代詩「三国志」—』を上梓。
HP「二条河原の落書」
<http://www.h7.dion.ne.jp/~nijo/>にて、作品の公開や創作活動報告を行っている。

受賞の言葉 二条千河

今年の子年である。私はねずみ年生まれではないが、あの小ささと言いつつ、せわしなさと言い、どうも他人事とは思われない。聞くところによれば、彼らは硬いものを齧らないでいると前歯が伸びすぎて餌を食べられなくなり、餓死してしまうらしい。ねずみのように丈夫な永久歯が生えるようにと抜けた乳歯を軒下へ投げる風習があるが、そんな宿命を背負うくらいなら、軟弱なヒトの歯で十分だという気がする。

本賞への応募は三度目になるが、ありがたいことに毎回、誌上にて講評を頂いている。そのたびに、自分の作品は本当に「詩」なのだろうか、という根本的な疑問に立ち戻る。正直を言えば、詩でなくてもよい、と思う。ただ、何であれ書き続けていなければ、そうしてすり減らしていかなければ、私の牙はいつか私の口を塞いでしまうかも知れない。

忌憚ないご感想、ご批判、すべての歯応えは生き延びるためのよすがとなる。こうして、またその機会を授かったことに、心より感謝申し上げます。

風

空を見上げると
幾重にもかさなる光の層の中で
はためく風

光る糸がぼくの手につたえる
はげしい気の奔流

よどみ
渦まき

せせらぎ
歌

ジェット機の翼が

空を豆腐のように切り裂いて

見えない青の中に

血がほとぼしる

と見るまに

やさしい風がなだれこみ

傷を癒し

ゆらぎ

たゆたい

雲の繊維に

長澤靖浩

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



受賞の言葉

長澤靖浩

ながさわ やすひろ

1960年 大阪府生まれ
1985年 大谷大学大学院 文学研究科 仏教学専攻 修士課程修了
1985年～大阪府公立学校教員
2004年 『魂の螺旋ダンス はるかなる今ここへ』 第三書館より上梓
2006年 『ええぞ、カルロス』 第8回 人権絵本原作コンクール優秀賞

光が満ちかよう
はてしなくふりそそぐ
オーロラ
宇宙線
時に隕石
おわりのない天上大風に
深くつきささる
ぼくの
風

死の扉の向こう側からでなければ観られないような光景を、詩に描いていきたい。生きている今ここで、言葉によるアートとして紡いでいこう。歎びも悲しみも愛も憎しみもぜんぶ感じ、すべて超越し、死から逆照射し、そのうえでもう一度、この生をあるがままに抱きしめたい。「日向の歌」では心身を爆破して空なるものの静けさへ旅した。「風」でははるかなる天空と今ここを一本の糸でつなぎ、その手ごたえをびんびん感じた。そして「カレイドスコープ」では色即是空の合わせ鏡がめくるめく光の乱射となりダンスを始めた。かな？（笑） さあ、みんな、もっともっと一緒に踊ろう。この世は光の回り舞台……。